

令和 3 年 5 月 10 日現在

機関番号：44518  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2017～2020  
課題番号：17K03306  
研究課題名(和文) 鯨類資源利用の新形態 捕鯨とホエール・ウォッチングの共存をめざす人類学的研究  
研究課題名(英文) An Anthropological Study for the Coexistence of Whaling and Whale Watching.  
研究代表者  
浜口 尚 (Hamaguchi, Hisashi)  
園田学園女子大学短期大学部・その他部局等・教授  
研究者番号：30280093  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、捕鯨とホエール・ウォッチングの共存が可能であるか否かを検討し、可能であるならば、その枠組みの確立をめざして、ドミニカ共和国サマナ地域、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島、アメリカ合衆国ニューイングランド地方において、現地調査を実施した。その結果、次のことが明らかになった。(1) 一時的に回遊してくる鯨類を対象として捕鯨を実施している地域においては、ホエール・ウォッチングは捕鯨の代替物にはならない。(2) 定住、あるいは一定期間滞在する鯨類を対象とした場合、海域別、季節別、鯨種別により、捕鯨とホエール・ウォッチングの共存は可能となるかもしれない。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

同一系群(北大西洋系群)に属し、北大西洋一帯を回遊するザトウクジラの地域ごとに異なる利用法(ドミニカ共和国サマナ地域：ホエール・ウォッチング、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島：捕鯨、アメリカ合衆国ニューイングランド地方：ホエール・ウォッチング)を現地調査のうえ、それぞれの特徴を取りまとめ、比較検討した点に学術的意義がある。また、ザトウクジラのような回遊性鯨類を対象とする捕鯨が実施されている地域においては、ホエール・ウォッチングは捕鯨の代替産業にならないことを明示した点に社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：In order to establish a framework of coexistence between whaling and whale watching as part of a regional economy, I conducted field research in Samana Bay, Dominican Republic, Bequia Island, St. Vincent and the Grenadines, and New England, the United States. The results of this study are as follows: (1) whale watching is not an acceptable alternative to whaling where migratory cetaceans are hunted; (2) the coexistence of whaling and whale watching might be possible depending on the sea area, season, and species of resident or long-staying cetaceans being hunted.

研究分野：文化人類学

キーワード：捕鯨 ホエール・ウォッチング 生物資源の持続的利用 反捕鯨運動 ドミニカ共和国 ベクウェイ島  
ニューイングランド地方

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) カリブ海、セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島においては1875-76年頃にザトウクジラを対象とする捕鯨が開始され、1987年に開催された第39回国際捕鯨委員会(IWC)総会において、「先住民生存捕鯨」として承認されている。その一方、海外の鯨類保護団体から資金援助を受けた地元団体が2012年より捕鯨をホエール・ウォッチングに転換する運動を開始し、2014年には稼働中であった捕鯨ボート1隻を買収、捕鯨活動の将来に大きな不安を与えた。そのホエール・ウォッチングを推奨する団体が事業モデルとしたのが、カリブ海地域において参加者数、総収入とも第1位を誇るドミニカ共和国(サマナ地域)でのホエール・ウォッチングであった。

(2) 1993年3月にベクウェイ島近海において捕殺されたザトウクジラが、その尾ビレ裏側の写真から、1987年にアメリカ合衆国ニューイングランド地方メイン湾で撮影された個体と同一であることが明らかになった。アメリカ合衆国は参加者数、総収入とも世界第1位のホエール・ウォッチング実施国であり、同国内ではニューイングランド地方が参加者数、総収入とも第1位を占めている。このようにザトウクジラと捕鯨とホエール・ウォッチングを媒介として、ベクウェイ島、ドミニカ共和国サマナ地域、アメリカ合衆国ニューイングランド地方は深く結びついており、これら3地域は捕鯨とホエール・ウォッチングの共存についての研究にふさわしい材料を提供してくれるのである。

### 2. 研究の目的

(1) 北大西洋一帯を回遊する北大西洋系群ザトウクジラを対象としてホエール・ウォッチングを実施しているドミニカ共和国サマナ地域とアメリカ合衆国ニューイングランド地方、および同系群ザトウクジラを対象として捕鯨を実施しているベクウェイ島での現地調査により、ホエール・ウォッチングおよび捕鯨が地域社会に与えている社会経済的影響を考察する。

(2) その成果に基づいて、ベクウェイ島において捕鯨とホエール・ウォッチングが地域産業として共存することが可能か否かを検討し、可能であるならばその枠組みを確立する。

### 3. 研究の方法

(1) 2017年度はドミニカ共和国サマナ地域において現地調査を実施し、ホエール・ウォッチングに関する資料を収集した。あわせてサマナ鯨博物館を訪問し関連資料を収集した。2018年度はセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国ベクウェイ島において現地調査を実施し、捕鯨およびホエール・ウォッチングに関する資料を収集した。あわせてベクウェイ・ボート博物館を訪問し関連資料を収集した。2019年度はアメリカ合衆国ニューイングランド地方において現地調査を実施し、ホエール・ウォッチングに関する資料を収集した。あわせてニューベッドフォード捕鯨博物館を訪問し関連資料を収集した。

(2) 最終年の2020年度は、日本国内において補足資料を収集したうえで、過去3年間の海外調査で収集した捕鯨およびホエール・ウォッチングにかかる資料を比較検討し、4年間の研究を総括した。

### 4. 研究成果

本研究により得られた成果は次のとおりである。

(1) 2017年のホエール・ウォッチング期間中(1月~3月)、ドミニカ共和国サマナ湾一帯におけるホエール・ウォッチング参加者は5万7708人であり、2016年の参加者5万4983人よりも2725人の増加であった。また目撃されたザトウクジラ数は2017年:521頭、2016年:493頭であった。サマナ湾一帯における公表されている直近のホエール・ウォッチング参加者は2008年の2万6700人であり、9年間でホエール・ウォッチング参加者は2.2倍に増加しており、ホエール・ウォッチングが地域経済に一定程度貢献していることが理解できた。

(2) サマナ湾一帯は北大西洋を回遊するザトウクジラの出産・子育て海域となっており、研究者自身が参加したホエール・ウォッチングにおいても母仔連れのザトウクジラを目撃できた。仔鯨は呼吸のため、短間隔で浮上しなければならず、それがザトウクジラを目撃を容易にしていることが確認できた。従って、本件事例を出産・子育て海域ではない他地域(ベクウェイ島など)におけるホエール・ウォッチングの事業モデルとすることには困難が伴うであろうこともあわせて理解できた。

(3) ニューイングランド地方におけるホエール・ウォッチングは、ボストン東方沖約40kmに位置するステルワージェン・バンクー帯が中心であり、摂餌のために回遊してくるザトウクジラが

観鯨の主対象となっている。ホエール・ウォッチング・ツアー開催期間は、4月上旬から10月下旬であり、7月～8月が最盛期である。ボストン港からステルワーゲン・バンクまでは、高速船で片道約1時間かかり、現地での滞在1時間を含めて3時間のツアーが一般的である。2019年のツアー参加料金は大人1人53ドル(5830円)であった。同年、マサチューセッツ州内では12業者がホエール・ウォッチング事業を運営していた。正確なホエール・ウォッチング参加者数は入手できなかったが、毎年100万人以上がニューイングランド地方においてホエール・ウォッチングに参加するといわれている。これらの事実からホエール・ウォッチングが当該地域において、主要観光産業となっていることが理解できた。

(4) 2018年9月、ブラジルで開催された第67回国際捕鯨委員会(IWC)総会において、ベクウェイ島民に認められていた先住民生存捕鯨としてのザトウクジラの捕殺枠(2013～2018年の6年間、24頭)の更新(2019～2025年の7年間、28頭)が承認された。これを受けて、ベクウェイ島の捕鯨関係者には従来以上に積極的に捕鯨に取り組もうとする気概が見受けられた。2019年3月時点で、同地には捕鯨チームが2チーム存在していた(捕鯨従事者計16人)。両チームとも50歳台が捕鯨活動の中心であるが、そのうちの1チームに30歳台の新人が加わり、少しずつではあるが捕鯨従事者の若返りが進みつつあった。その一方、捕鯨から引退した2人が2014年より計画しているホエール・ウォッチング事業については、まだ開始されていなかった。1人は所有する漁船をホエール・ウォッチングが可能なボートに改装していたが、エンジンの購入費用(1万3000米ドル)のめどが立っていなかった。もう1人も資金不足で全く進展していなかった。これらの事実から、ホエール・ウォッチング事業の実施については、前途多難であることが理解できた。

(5) 捕鯨とホエール・ウォッチングの共存については、理論的には、海域別(捕鯨海域とホエール・ウォッチング海域を区分すること)、季節別(たとえば、春季に捕鯨を実施し、秋季にホエール・ウォッチングを実施するなど、季節により両者を区分すること)、鯨種別(捕鯨対象鯨種とホエール・ウォッチング対象鯨種を区分すること)により可能である。しかしながら、本件区分が可能となるためには、捕鯨とホエール・ウォッチングが同時に実施できる広さの海域があり、複数の鯨類が一定期間以上滞在することが必要である。

(6) ベクウェイ島の場合、捕鯨もホエール・ウォッチングもその対象は2月上旬から5月下旬にかけて同島南東海域を通過するザトウクジラである。海域も季節も鯨種も重なり合っている。ホエール・ウォッチングの創業をめざす元捕鯨者の1人は、捕鯨出漁日とホエール・ウォッチング出航日の日別調整を考えていたが、この種の話し合いには多くの困難が伴う。なぜならば、ザトウクジラは多くて月に数回通過するだけであり、特に捕鯨者にとっては、追跡しても捕殺に成功する保証はない以上、発見すれば必ず追跡し、捕殺を試みるのが最善策となっているからである。

(7) ベクウェイ島においては、ザトウクジラが陸揚げされれば、捕鯨に直接関与しない地域住民にも慣習的な鯨産物(鯨肉・脂皮)の分配法により、鯨産物が行き渡る。鯨産物を食することにより、ベクウェイ島民は地域社会において精神的な充足感を得るのである。これに対して、ホエール・ウォッチングは参加者(外国人旅行者が多くを占めるであろう)には喜びと楽しみを与えるかもしれないが、地域住民には何も与えない。ドミニカ共和国の事例では、ホエール・ウォッチングによる収入の半分は国外に流出するとされており、残りの半分もホエール・ウォッチング関係者間で分配されるだけである。結局のところ、ホエール・ウォッチングは捕鯨とは異なり、ホエール・ウォッチング関係者を除いて地域社会にほとんど貢献しないのである。以上を総括すれば、ベクウェイ島においては、ホエール・ウォッチングは文化的にも社会経済的にも捕鯨の代替物にはなりえないのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 浜口 尚	4. 巻 55
2. 論文標題 ロックと反捕鯨運動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 園田学園女子大学論文集	6. 最初と最後の頁 149-178.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜口 尚	4. 巻 54
2. 論文標題 ナンタケット・スレイライド、あるいは北米捕鯨史にかかわる一断想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 園田学園女子大学論文集	6. 最初と最後の頁 141-153.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浜口 尚	4. 巻 53
2. 論文標題 サマナ湾から展望したベクウェイ島におけるホエール・ウォッチング事業の可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 園田学園女子大学論文集	6. 最初と最後の頁 175-183.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浜口 尚
2. 発表標題 ドミニカ共和国サマナ湾におけるホエール・ウォッチング
3. 学会等名 日本セトロロジー研究会第29回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

(一般書掲載論文)

浜口 尚「生き残る先住民生存捕鯨、停滞するホエール・ウォッチング構想 カリブ海、ベクウェイ島の事例より」岸上伸啓 [ 編 ] 『捕鯨と反捕鯨のあいだに世界の現場と政治・倫理的問題』京都：臨川書店、2020年、123-142頁。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------